

グローバル人材の育成に対する貢献

最近、グローバル人材の育成が急務という趣旨の記事をよく目にする。グローバル人材とは何かについて、識者によって定義は違う。「グローバル人材育成会議」の中間まとめ(2012年)では、グローバル人材とは「語学力・コミュニケーション力」「主体性・積極性・チャレンジ精神・協調性・柔軟性・責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」の3つの要素を兼ね備えた人材と考えられている。

産業界ではもちろん、大学でもグローバル人材に対する関心は高い。文部科学省は2012年度から5年間の計画でグローバル人材育成推進事業を実施している。2012年にはタイプA：全学推進型11校、タイプB：特色型31校の採択が発表されたが、採択率は28%(件数)と競争は激しかった。タイプAでは定員によって年間1億4,000万～2億6,000万円、特色型では年間1億2,000万円の補助金が出る大型プロジェクトである。

採択事業については、日本学術振興会のウェブサイト上で構想調書が公開されている。各大学それぞれの設立理念と現状に合わせて調書の内容を工夫している。例えば、タイプAに採択された関西学院大学ではこれまでも「国連学生ボランティア」などを通して実践型グローバル人材を育成してきたが、このプログラム参加の成果として次のような知識・技能の成長が見られたとしている。①外国語能力・コミュニケーション能力向上に継続的に取り組んでいる(外国語・コミュニケーション能力)、②学びに対して意欲的になり、指示されなくても自分で考えて動く(主体性・積極性・責任感)、③物怖じせず、追い込まれても優先順位を考え課題をまとめる(チャレンジ精神)、④日本を再評価し、異文化に興



現地でのフィールドワーク実習

味を持つ(異文化理解と日本人としてのアイデンティティー)、⑤社会等の動向に関心を持ち、社会的正義感を持って行動できる(公共性・論理感)。能力のくくり方が異なるが、その内容はグローバル人材育成会議の定義とほぼ同じである。

さらに、この経験に基づき、グローバル人材に必要な知識・技能のウエイトによってグローバル人材を「グローバルリーダー」「グローバルエキスパート」「グローバルシチズン」の3タイプのグローバル人材像を設定している。学生の特性、長所、志向は一樣ではないことから、多様性を活かすために3種類を考え、グローバル人材という漠然とした人材像をより具体化すると共に、学生の特性に合わせて、その育成プログラムを現実的に考えているのが特徴的である。

このように定義されているグローバル人材が豊富にいて、社会的に活躍している業界がある。言うまでもなく、国際開発援助業界である。その人材はこれまで「開発援助」という比較的限定された領域で活躍していたが、これからはその能力を産業界全般や人材育成を行う大学で生かすことも求められている。グローバル人材の供給源として、国際開発援助業界で活躍した人材が他の産業界に転身して活躍することあろうし、これまでの国際的活動や人材育成のノウハウを活用して、産業界や大学のグローバル人材育成事業にも大きな寄与ができるのではないだろうか。グローバル人材育成が社会的に急務となっている今日、国際開発援助業界にはより幅広い積極的な社会的貢献が期待されている。

(文責：国際開発センター主席研究員 牟田 博光)



国連学生ボランティアに参加した関西学院大学の学生